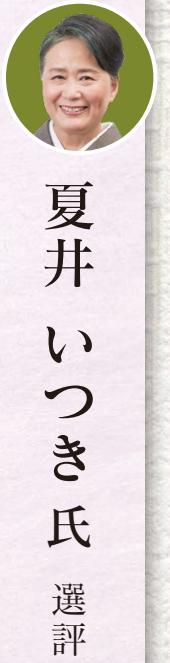


# 東北お遍路俳句コンテスト



夏井 いつき 氏 選評

## 天 しづけさは遍路の道の蘆の角

柔らかにきらめく春の水辺を行く遍路道に、つんつんと生え出した角のような、鋭くて小さくて真っ青な蘆の芽を見つけました。通りつづ黙々と歩む遍路道の「しづけさ」の中、まだ可愛らしい「蘆の角」に新しい命の再生を感じたのでしよう。蘆の角は生き生きと育つてこれから大群落となつていきます。

## 地 絵巻解くやうみちのくに夏來たる

「絵巻」を解くようにやつてきたみちのくの夏、とはどんな夏なのでしょう。長い冬に耐え、爆發的にやつて来るみちのくの夏への喜びを、絵巻をするすると解いていくワクワク感にたとえているのかもしれません。新緑が復興の町を包み、里も山も萌え始める緑豊かな「みちのく」は、まさに再生の季節です。

## 人 福島の花野浴槽だけ残る

震災によつて破壊された土地でしようか。避難を余儀なくされ、今は花野となつた土地に「浴槽だけ」がぽつんと残されています。ひび割れや変色が被災の歳月を物語つているのかもしれません。かつて生活していた人々の心身を温め癒やしていた浴槽を、今は花野が優しく包みこんでいます。

## 繁華街跡地歩けば飛蝗飛ぶ

商店や飲食店の建ち並んでいたかつての繁華街。復興がままならず、放置されたまま草が生え、歩けば飛蝗が飛ぶような状態なのでしょう。ここも昔は繁華街であったのに……、という悲痛な感慨もありますが、まちがいなくここに「飛蝗」という命が存在していることへの希望も感じられる一句です。

## 踏み切りの海へとひらく遍路道

福島県から青森県までの太平洋沿岸を行く東北お遍路の道は、津波の被災地を巡礼していきます。踏切を待ちつつ眺めているのは、今は穏やかな「海」ですが、あの日の海をも思い出しているのかもしれません。今、明るい春の色を湛えた海へと開き始めた踏み切り。遍路の旅はまだまだ続きます。

## 入選 汐漬く野に綿の種蒔く漢たち

そちこちからみんなが寄つてきて花野  
百二基の墓石積み上ぐ盆用意  
水底に愛車の見えし余寒かな  
また来ると浜菊に告げ無人駅  
月浦や沖より閉ざす夏の霧  
狐火の濡れて立つとき母帰る  
一株の薔薇残さるる仮設跡  
泥黒板にあの日の日直赤とんぼ  
避難所は四年三組燕来る

末永 栄子（宮城県塩釜市）

半田 真理（栃木県宇都宮市）

森川 雅美（東京都杉並区）

中野 弘樹（埼玉県春日部市）

曾根 新五郎（東京都式根島）

久保 哲也（愛媛県松山市）

二階堂 光江（岩手県盛岡市）

満保 千里（富山県高岡市）

中川 晋太郎（兵庫県神戸市）

大信田 宏子（岩手県盛岡市）

安達 広子（岩手県盛岡市）

石の森 市朗（宮城県石巻市）

豊島 喜美子（岩手県宮古市）

丸山 千代子（宮城県仙台市）

針生 きよみ（宮城県仙台市）

## 天 三月や読経のごとく海が鳴る

震災のあつた三月は特別な月になつてしまつた。東日本大震災は今なお記憶から消えない。特に大津波のあつた海を前に立つと、悲しみや苦しみが複雑にこみ上げてくる。これを「読経」と直截に表現したことで、鎮魂の思いを一層深くさせた。

## 地 遍路杖さすつて足をさすりけり

お遍路の杖は、お大師様の化身。まさに同行の象徴。その形も卒塔婆に似て、自らのお墓の意味合いもあるとされる。それゆえ、遍路の疲れはそのまま杖の疲れと思うのはよくわかる。「さすつて」と杖をいたわる気持ちには、同行一人の精神が良く現れている。

## 人 まつろわぬ民の大地や実梅もぐ

「制服」「文庫」からは、世代を越えた鎮魂を深める姿が見えてくる。いつまたやつて来るかも知れない惨禍のためにも、あの日の記憶を日々のなか深く留めておく必要がある。と同時に、これからも幾世代にもわたつて伝え続けていかなければならない。遍路の旅は永遠に続くのだ。

## 制服に文庫忍ばせ遍路かな

阿弓流為の名を出すまでもなく、蝦夷の時代から、みちのくの民は征服者に抵抗を示す「まつろわぬ民」であった。この「まつろわぬ民」と「実梅」が生々しく一句の中に輝くように置かれてある。ここからは豊穣なるみちのくの姿が浮かび上がつてくる。

## 入選 遍路とは風になること奥州路

遍路みち芒一本杖にして  
避難所は四年三組燕来る

## 新築の家並貫いて遍路かな

みちのくの旅はここから春の土  
福島の空にカンナの燃え立ちて

## 蝉の声歩け歩けと遍路道

遍路道水平線に続く道  
春の虹追いかけ遍路の始まりぬ

## 子に届くまで割れるなよ石鹼玉

## 天 しづけさは遍路の道の蘆の角

柔らかにきらめく春の水辺を行く遍路道に、つんつんと生え出した角のような、鋭くて小さくて真っ青な蘆の芽を見つけました。通りつづ黙々と歩む遍路道の「しづけさ」の中、まだ可愛いらしい「蘆の角」に新しい命の再生を感じたのでしよう。蘆の角は生き生きと育つてこれから大群落となつていきます。

## 地 絵巻解くやうみちのくに夏來たる

「絵巻」を解くようにやつてきたみちのくの夏、とはどんな夏なのでしょう。長い冬に耐え、爆發的にやつて来るみちのくの夏への喜びを、絵巻をするすると解いていくワクワク感にたとえているのかもしれません。新緑が復興の町を包み、里も山も萌え始める緑豊かな「みちのく」は、まさに再生の季節です。

## 人 福島の花野浴槽だけ残る

震災によつて破壊された土地でしようか。避難を余儀なくされ、今は花野となつた土地に「浴槽だけ」がぽつんと残されています。ひび割れや変色が被災の歳月を物語つているのかもしれません。かつて生活していた人々の心身を温め癒やしていた浴槽を、今は花野が優しく包みこんでいます。

## 繁華街跡地歩けば飛蝗飛ぶ

商店や飲食店の建ち並んでいたかつての繁華街。復興がままならず、放置されたまま草が生え、歩けば飛蝗が飛ぶような状態なのでしょう。ここも昔は繁華街であったのに……、という悲痛な感慨もありますが、まちがいなくここに「飛蝗」という命が存在していることへの希望も感じられる一句です。

## 踏み切りの海へとひらく遍路道

福島県から青森県までの太平洋沿岸を行く東北お遍路の道は、津波の被災地を巡礼していきます。踏切を待ちつつ眺めているのは、今は穏やかな「海」ですが、あの日の海をも思い出しているのかもしれません。今、明るい春の色を湛えた海へと開き始めた踏み切り。遍路の旅はまだまだ続きます。

## 入選 汐漬く野に綿の種蒔く漢たち

そちこちからみんなが寄つてきて花野  
百二基の墓石積み上ぐ盆用意  
水底に愛車の見えし余寒かな  
また来ると浜菊に告げ無人駅  
月浦や沖より閉ざす夏の霧  
狐火の濡れて立つとき母帰る  
一株の薔薇残さるる仮設跡  
泥黒板にあの日の日直赤とんぼ  
避難所は四年三組燕来る

末永 栄子（宮城県塩釜市）

半田 真理（栃木県宇都宮市）

森川 雅美（東京都杉並区）

中野 弘樹（埼玉県春日部市）

曾根 新五郎（東京都式根島）

久保 哲也（愛媛県松山市）

二階堂 光江（岩手県盛岡市）

満保 千里（富山県高岡市）

中川 晋太郎（兵庫県神戸市）

大信田 宏子（岩手県盛岡市）

安達 広子（岩手県盛岡市）

石の森 市朗（宮城県石巻市）

豊島 喜美子（岩手県宮古市）

丸山 千代子（宮城県仙台市）

針生 きよみ（宮城県仙台市）

## 天 三月や読経のごとく海が鳴る

震災のあつた三月は特別な月になつてしまつた。東日本大震災は今なお記憶から消えない。特に大津波のあつた海を前に立つと、悲しみや苦しみが複雑にこみ上げてくる。これを「読経」と直截に表現したことで、鎮魂の思いを一層深くさせた。

## 地 遍路杖さすつて足をさすりけり

お遍路の杖は、お大師様の化身。まさに同行の象徴。その形も卒塔婆に似て、自らのお墓の意味合いもあるとされる。それゆえ、遍路の疲れはそのまま杖の疲れと思うのはよくわかる。「さすつて」と杖をいたわる気持ちには、同行一人の精神が良く現れている。

## 人 まつろわぬ民の大地や実梅もぐ

「制服」「文庫」からは、世代を越えた鎮魂を深める姿が見えてくる。いつまたやつて来るかも知れない惨禍のためにも、あの日の記憶を日々のなか深く留めておく必要がある。と同時に、これからも幾世代にもわたつて伝え続けていかなければならない。遍路の旅は永遠に続くのだ。

## 制服に文庫忍ばせ遍路かな

阿弓流為の名を出すまでもなく、蝦夷の時代から、みちのくの民は征服者に抵抗を示す「まつろわぬ民」であった。この「まつろわぬ民」と「実梅」が生々しく一句の中に輝くように置かれてある。ここからは豊穣なるみちのくの姿が浮かび上がりつてくる。

## 入選 遍路とは風になること奥州路

遍路みち芒一本杖にして  
避難所は四年三組燕来る

## 新築の家並貫いて遍路かな

みちのくの旅はここから春の土  
福島の空にカンナの燃え立ちて

## 蝉の声歩け歩けと遍路道

遍路道水平線に続く道  
春の虹追いかけ遍路の始まりぬ

## 子に届くまで割れるなよ石鹼玉

## 天 しづけさは遍路の道の蘆の角

柔らかにきらめく春の水辺を行く遍路道に、つんつんと生え出した角のような、鋭くて小さくて真っ青な蘆の芽を見つけました。通りつづ黙々と歩む遍路道の「しづけさ」の中、まだ可愛いらしい「蘆の角」に新しい命の再生を感じたのでしよう。蘆の角は生き生きと育つてこれから大群落となつていきます。

## 地 絵巻解くやうみちのくに夏來たる

「絵巻」を解くようにやつてきたみちのくの夏、とはどんな夏なのでしょう。長い冬に耐え、爆發的にやつて来るみちのくの夏への喜びを、絵巻をするすると解いていくワクワク感にたとえているのかもしれません。新緑が復興の町を包み、里も山も萌え始める緑豊かな「みちのく」は、まさに再生の季節です。

## 人 福島の花野浴槽だけ残る

震災によつて破壊された土地でしようか。避難を余儀なくされ、今は花野となつた土地に「浴槽だけ」がぽつんと残されています。ひび割れや変色が被災の歳月を物語つているのかもしれません。かつて生活していた人々の心身を温め癒やしていた浴槽を、今は花野が優しく包みこんでいます。

## 繁華街跡地歩けば飛蝗飛ぶ

商店や飲食店の建ち並んでいたかつての繁華街。復興がままならず、放置されたまま草が生え、歩けば飛蝗が飛ぶような状態なのでしょう。ここも昔は繁華街であったのに……、という悲痛な感慨もありますが、まちがいなくここに「飛蝗」という命が存在していることへの希望も感じられる一句です。

## 踏み切りの海へとひらく遍路道

福島県から青森県までの太平洋沿岸を行く東北お遍路の道は、津波の被災地を巡礼していきます。踏切を待ちつつ眺めているのは、今は穏やかな「海」ですが、あの日の海をも思い出しているのかもしれません。今、明るい春の色を湛えた海へと開き始めた踏み切り。遍路の旅はまだまだ続きます。

## 入選 汐漬く野に綿の種蒔く漢たち

そちこちからみんなが寄つてきて花野  
百二基の墓石積み上ぐ盆用意  
水底に愛車の見えし余寒かな  
また来ると浜菊に告げ無人駅  
月浦や沖より閉ざす夏の霧  
狐火の濡れて立つとき母帰る  
一株の薔薇残さるる仮設跡  
泥黒板にあの日の日直赤とんぼ  
避難所は四年三組燕来る

渡会 克男（千葉県柏市）

曾根新五郎（東京都式根島）

森川 雅美（東京都杉並区）

中野 弘樹（埼玉県春日部市）

曾根 新五郎（東京都式根島）

久保 哲也（愛媛県松山市）

二階堂 光江（岩手県盛岡市）

満保 千里（富山県高岡市）

中川 晋太郎（兵庫県神戸市）

大信田 宏子（岩手県盛岡市）

安達 広子（岩手県盛岡市）

石の森 市朗（宮城県石巻市）

豊島 喜美子（岩手県宮古市）

